

「<sup>やまと</sup>大和くん」

肩を揺り動かされて、タケルは目が覚めた。

いつの間にか学校の図書室で、机に突つ伏したまま眠つてしまつたようだ。窓から夕陽が差している。

（あれは夢だつたのか…）

声をかけたのはタケルのクラスである4年1組担任の井沢先生だつた。タケルは枕についていた『生き物大辞典』を、ばつが悪そうに横に寄せた。

「すみません」

「いいのよ、睡眠学習つて言葉もあるくらいだしね」 そういう言つて井沢先生はクスッと笑つた。

タケルはこの先生が大好きだ。年齢は三十歳くらいらしいが、いつも明るい色のワンピースを着て飛び回つてゐる印象がある。休日も家でじつとしてることは少ないらしく、美術館や演奏会に出かけた話をよくしてくれる。そんな先生がタケルの中でいつとう株を上げたのは、ものすごい読書家だつたからだ。先生に言わせると「自身だからヒマなのよ」ということらしいけど。

一学期の間に先生に勧められて読んだ本は二十冊は超

えたろう。大学で児童文学を専門に勉強したという先生は、「こんな本、ありますか?」とタケルが問いかければ、いつも、おすすめの本を的確に選んでくれる。

「おー、大和くんは生物に興味が湧いたのかな?」

先生は『生き物大辞典』をパラパラとめくつた。

「あ、はい、なんとなく」

それは全十数巻の大辞典の第一巻だつた。地球の誕生から、生命のめばえ、人類の出現までが載つていて。クーラーが程良く効いた図書室で、夏の午後の心地よさもあって眠つてしまつたが、眠りに落ちる直前に見ていたのが「人類のあけぼの」というページだつた。

だから、あんな夢を見たんだ。

夢の中でタケルは、猿人と呼ばれていた頃の人類になつっていた。何百万年も過去の地球上に生きていた人間だ。あの小猿の母親は、大辞典に載つている猿人のイラストにそつくりだつた。

それにしてもリアルな夢だつた。今でもあの地震の激しさを覚えてる。砂埃の混じつた乾いた空気のにおい、握つた根つこの感触、それに小猿を抱いたときの暖かさ。

「そろそろ閉めるわよ」

先生の言葉に、はいと返事してタケルは荷物をまとめ始めた。夢の話を先生に聞いてもらいたかつたけど、ま

た今度にしよう。

2

「先生、さようなら」

「さようなら、あんまり夜遅くまで本読んでちやだめよ」

井沢先生は颯爽<sup>さつそう</sup>と自転車に乗つて駅の方へと走り去つた。それを見送つてタケルも自転車にまたがつた。

タケルの家は駅とは反対の方角にある。山すそを切り開いて、造成してできた住宅地だ。学校から家まで上り坂が続くので、変速機のないタケルの自転車では立ち漕<sup>こ</sup>ぎを続けることになる。かなりしんどい。

二、三分も走ると汗が噴き出してきた。蝉時雨<sup>せみしぐれ</sup>がここかしこの木立<sup>こだち</sup>からしきりに降つてくる。北で育つたタケルには関西の気候がまだなじめない。Tシャツがまるで蝉の声のようにベタベタと体にまとわりついてくる。

今日は、夏休み中にもかかわらず、図書室が開いてる日だつたので、昼食後に出てかけたのだ。当然授業はなかつたので、一日中読書ができるタケルは大満足だつた。最後の坂道を上りきつて、墓場の横を抜けると桜が丘団地だ。タケルの家はその真ん中辺にある。

「やあおかえり」と庭に水をやつていた祖父ちゃんが出

迎えてくれた。

「ただいま。あ、このにおい…」

「天ぶららしいぞ、今夜は」

「やつた！」とタケルはガツツポーズを作りながら家の  
中へ駆け込んだ。

靴を脱ぐと、いいにおいが鼻をくすぐった。誘われる  
ように台所の暖簾をくぐつた。

「あらあ、おかえりい」と祖母ちゃんが明るい声と笑み  
で迎えてくれた。「もうすぐよお」

「ただいま！ もう空腹全開だよ」

「あらまあ、それじゃ早くご挨拶して、カバン置いてい  
らっしゃい」

「うん」

家のの中は暗い。築三十年のこの家はあちこちに綻びが  
生じていて、毎年いたるところが補修の必要に迫られて  
いる。

でも家を暗くしてるのはそのせいじゃないとタケルは  
気づいていた。母さんだ。

タケルは廊下を突き抜けて、奥の間の扉を叩いた。

「母さん、ただいま」

「——おかえり」

母さんとは、たいてい扉越しにしか話さない。食も細  
いからいつしょに夕餉を囲むことも最近は少なくなつた。

いつもどおり、祖父母と三人の夕食を終えたあと、居間でNHKスペシャルの世界遺産特集を2時間ほど見て過ごした。9時をまわって、祖母ちゃんが声をかけてくれたので、タケルは風呂に入つて汗を流した。

いつもどおりの一日だ。表面的には。そう、いつもなら入浴で火照った肌を夏の夜風が撫でるこの時間には、睡魔が襲ってくるはずだつた。でも今日は全然眠くならない。夕方から体を支配しているワクワク感のせいだ。

タケルが二階の自室へ上がろうと階段の手すりに手をかけたときだつた。音楽が聞こえてきた。かすかに聞こえるのは母さんの部屋からだ。タケルは階段をかけた足を降ろし、母さんの部屋に向かつた。

「母さん、起きてる?」タケルは扉に声をかけた。

「——ええ」

声が返ってきた。タケルは静かにノブを回し、扉を手前に開けた。部屋の中から光が差した。母さんの姿を照らし出していたのは、燭台の上の三本のろうそくだ。

母さんはベッドに静かに腰掛けていた。この部屋から出ることが少なくなつて数ヶ月。顔色は白くなり、体つきもすっかり細くなつたけど、瘦せこけた印象はなかつ

た。ただ存在感が薄い。タケルには母さんまでの距離が果てしなく遠く感じられた。

「母さん、具合はどう?」

「いいわよ」

「今日は、えつと、暑かつたけど学校へ行つたよ」

「そう」

流れているのはピアノの静かな曲だ。母さんが目覚めているときは、いつもこの曲が小机にセットしてあるCDプレーヤーから流れている。

「ぼく、もう寝るね」

「そう――おやすみなさい」

「おやすみなさい」

そう応えてタケルは部屋を出て、静かに扉を閉めた。  
そしてふうーっと息を吐いた。

祖父ちゃんには、もつと頻繁に声をかけてあげなさいと言われるけれど、無理だ。母さんを前にすると、つい肩に力が入るし、顔が強ばってしまう。どこか別世界に住んでいるような、あんな母さんを見るのはつらい。ぼくだって泣きたいときはあるんだ。でも母さんの前でそんな顔は見せられない。

階段を上る途中で、ピアノ曲が消えた。母さんはぼくの顔を見たかったのかもしれない…。

ベッドに横になつたものの、眠れそうになかった。今日学校で見た夢を誰かに話したくてしようがない。荒唐無稽な夢物語だけに、誰にでも話せることじやない。祖父ちゃんたちでは駄目だ。何人か友人の顔が浮かんだが、笑われるに決まつてゐる。井沢先生なら親身に聞いてくれるだろうけど、どうにも照れくさい。——となれば、残るはひとりしかいない。いや、こんな時まさに打つてつけの人物がいる。

新出博士にいでだ。

タケルは即、携帯電話でメールを打つた。

“こんばんはタケルです。今晚電話してもいいですか？”

返事は1分で來た。

“いますぐOK”

タケルは間髪置かずに電話をかけた。コールが一回鳴つただけで相手が出た。

「よおーい、タケル、ウエルカム！」

「こんばんは、博士、遅くにごめんなさい」「外交儀礼などいらん！ 元気にしとるか？」

「はい、なんとか」

「“なんとか”か。不景氣だな」

新出博士は山形の米沢に住んでいる。タケルが母さんと春まで住んでいた町だ。

五十歳を越えた博士は独りで暮らしていた。博士は誰とも話さない、交わらない、要するに偏屈者へんくつものだった。自宅を研究所と称して、ときどき屋内から奇声を響かせては、周囲を驚倒せしめていた。そんな博士は、町の人たちにとつて腫れ物はのような存在だったのだ。

なのに、どうしてタケルは博士と知り合うことになつたのか？

その頃、タケルは孤独だった。そして毎日が退屈だった。だから誰とも没交渉な博士の暮らしぶりに興味を持った。変人の姿を覗き見てやろうと考えたのが、そもそものきっかけだった。

タケルは裸眼で両眼とも一・〇は余裕だ。裏の高い塀の上によじ登り、その眼で研究所の中を覗きこんだ。そしたら、世にも恐ろしい怪物と正面からにらめっこするハメになつてしまつた。腰が抜けたタケルを捕まえたのは、怪物の着ぐるみを着た人間、博士だった。

タケルが捕まつてからもおとなしくしていたのは、博士が悪そうな人に見えなかつたからだ。そう言つたら、「タケルは眼がいいからな」と不思議なことを言つた。そしてこうも言つた。

「君はその良い眼で、見たいことも、見たくないことも、

いっぱい見てきたようだな」

5

それ以来、タケルは新出博士の研究室に入り浸るようになった。博士は世間で噂されるような偏屈ではなかつた。多少、いやかなり変わつてはいたが、タケルとは非常に馬が合つた。

遊びに行くと博士はいつもタケルを笑顔で迎えてくれた。そして訪問を重ねるに連れ、居座る時間がだんだん長くなつていつた。ときには研究の邪魔にならないだろうかと思うこともあつたが、博士はそんな素振りをまったく見せなかつた。

意外にも博士は話し好きで、話し上手だつた。研究分野である生物に関する話を、タケルにわかるような易しい言葉で解説してくれた。昔は大学で教えたこともあるという。博士のような先生がいる大学なら行つてもいいなどと思つた。

研究所にはさまざま動物標本があつたが、檻<sup>おり</sup>に飼つてゐる本物の動物もいた。時に町の人耳にする奇声の正体はこれだつたのだ。元々は靈長類といわれる猿の研究がメインだつたが、いまは鳥類にも興味があるという。タケルが最初に忍び込んだとき、博士はまさに“鳥”に

なつていた。

「鳥の気持ちちは鳥にならんとわからん」

そんなことを自慢の髭<sup>ひげ</sup>をなでながら真顔で言う博士が、タケルはますます好きになつた。

博士は若い頃、世界中を旅して回つたという。旅をしながら、自分には何ができるのだろう、何をしたいのだろう、そう問い合わせ続けたそうだ。

「“自己探し”ですね」とタケルは訊いた。

「違うぞ。探す必要などない。自分はいつもここにいる。“自己探し”などという言葉が流行る<sup>はや</sup>から、自分を見失う人間が増えるのだ。わしはな、世界中でいろんなことを体験して、何をしたときに感動したり楽しくなつたりするようになっているのか、自分の体を調べたかつたのだ」

こんなふうに博士の語り口はいつも偏狭じみているが、妙に筋が通っている。しかも聞き上手だからタケルが「なるほど」というまで説明の労をいとわず、言葉をかえて話してくれる。

そんな博士が、なぜ町の人たちから疎まれるのか?

最大の疑問を当の本人に投げかけてみた。すると「わしに、町の連中とどんな話をしろというんだ?」と大爆笑されてしまつた。言われてみれば、博士との話題は、小学生であるタケルにも理解できるレベルではあるものの、

生物、物理、化学など、およそ世間話には似つかわしくないものばかりだ。タケルにすれば、今やテレビゲームよりも魅力的な世界なのだが。

遠く関西に引っ越してきた今でも、タケルが科学に興味を持ち続いているのは、博士の影響だ。

## 6

タケルが読書好きになつたのも、博士の膨大な蔵書のおかげだ。初めは博士に紹介されるままに閲覧していたが、博士が学会などで不在のときには、動物たちの世話をする約束で研究所の鍵を預かり、好きな本を日がな一日読みふけつた。

博士と出会つてからの数ヶ月は、タケルの中で宝石のように光り輝く思い出だった。

関西に引っ越してからも、タケルは週に一度は博士と電話で話した。掛けるたび、つい長電話になつてしまつが、IP電話を使つているのでお金の心配はいらない。「博士、今日はぼく、すごい夢を見たんです」とタケルは早速本題に入つた。

「ほう。聞かせてもらおうか」

タケルは就寝時間の早い家族に気遣つて、声が大きく

ならないよう注意しながら、受話器を持ちかえて、ベッドに腰掛けた。

「ぼくね、大きな地震に遭ったんです」という出だしで話し始め、老木の根が作る空洞に避難したこと、激しい揺れと共に目の前の地面がパックリ割れたこと、逃げまどう人々がそこに吸い込まれるように落ちたことで、一気呵成に話した。

地割れの件くだりでは耳に残る悲鳴がよみがえってきて、思わず身震いしてしまった。

「その様子を見たとき、心の中で“ざまあみろ”って叫んでしまったんです」

「そうか」

タケルは博士と話すとき、一切隠し事をしない。ちゅううちよ躊躇する気持ちがないではなかつたが、博士に話したことを後悔するようなことは、今まで一度もなかつた。

タケルは話を続けた。

地割れに落ちそな人を助けてしまつたこと、それが小猿であつたこと。

「猿う？」と、博士は意表を突かれたのだろう、声が裏返つっていた。

「そうなんです、博士が飼つてたチンパンジーぐらいの大きさで」

「いやあーこれは面白い」とワクワクしている。

「でしょう？ それで地震がおさまるのを一緒に待つていたら、今度は母親が登場したんです。それがね、猿じやなくて猿人えんじんだつたんですよ」

靈長類研究家の博士は呻うめき声を上げた。自分もその夢を見たい！と思つたのだろう。でもこの時点ではタケルはわざと話す順序をえていたのだ。

そして、その時がきた。

「でね、じつはぼく自身も猿人だつたんですよ」

7

「ぐぬ——」

新出博士はうなつた。タケルには博士の心の内が手に取るようにわかる。博士はよく口にしていたから。もしタイムマシンで好きな時代に行けるなら、猿が人間へと移り変わる頃に行つてみたいと。行つたら猿人の仲間に加わつて、いっしょに生活してみたい、とも。

人類の進化には、まだまだ謎の部分が多い。現代の我々は、骨の化石によつて昔の姿を類推するしかないのだが、現在判明している進化の流れには途切れている部分があつて、ミッキング・リンクと呼ばれている。DNA鑑定が導入されて、研究レベルは飛躍的に向上した今日でも、骨自体が発見されないと、真実を知ることはで

きないのである——。以上はもちろん博士の受け売り。

「タケルは仲間になつて生活しとつたのか？」

やつぱりそこが一番聞きたいらしい。

「ううん、仲間たちには出会わなかつた。家に到着する前に目が覚めたし」

「だが、猿人の着ぐるみ姿だつたということは、仲間になりすましとつたんだろうなあ」

「あ、違う、そうじやないんです」とぼくはあわてて訂正した。「着ぐるみじやなかつたんですよ」

「なに？ どういうことだ？」

「腕に、ざあーっと毛が生えてたんです。引っ張つてみたらちゃんと皮膚に生えてるのがわかつたんですよ」

「な：なんと——」

博士は再びうなり声をあげた。これは夢の話だつてこと、すでに忘れてるらしい。

「その毛がぼくの肩にも足にも、お腹にもビツシリ生えてたし」とだんだん得意げになつてきた。

「薄茶色というかベージュ色の毛が一面に」

「そうかあ……化石じや毛の色まで残つとらんからなあ。

——その夢の中のタケルは四足歩行で歩いとつたのか？』

「えつと——そう、四つ足で歩いてました」

博士はいま、本物の猿人にインタビューしてゐる気に

なつてるとと思う、絶対。

「なるほどなあ。で、小猿の親子はどうだつた？タケルと同じような姿をしどつたか？」

タケルは少し薄れてきた夢を必死で回想した。「うん、四つ足で歩いてたし…あれれ？」

「どうした？」

「親子の毛はね、すつごく濃い色だつた。焦げ茶色つていうのかな、そんな感じでした」

「ふうーむ」

電話越しに博士の椅子のきしむ音が聞こえた。

8

タケルは受話器を握る手の平が痛くなつてきたので左手に持ちかえた。右の耳たぶもずっと押しつけられていたので跡が付いていた。

電話の向こうで、博士が軽く咳払いした。

「——タケル。最近、髪を染めたか？」

「へ？」と思わず気の抜けた声が出てしまつた。

「なんのこと？ してませんよお」

「そうか。いやまさかとは思つたんだがな。タケルが茶

髪にしたせいで、夢の中までな…」

ふつ。タケルは吹き出してしまつた。緊張で肩に入つ

ていた力がスーツと取れた。電話からも、くくくという笑い声が聞こえてきた。しまいには一人とも爆笑してしまった。静かなトーンで。

「なあ、タケル」

「なんですか、博士」

「タケルはいい夢を見たな。本当に羨ましいよ」

「へへへ、たまたまそんな本を読んでたから」

「それで見られるんなら、わしなぞ毎晩、猿人たちと宴

会しとるはずなんだがな」

「猿酒飲み過ぎて、研究どころじゃないかも」

「言うなあ、タケルう」と博士は快笑した。

「タケルを起こしてくれた先生は、いい先生のようじゃの？」美人か？」「

「井沢美代子先生？」んーわりとキレイかな」

「ほーほー」

「先生にもね、いろんな本を紹介してもらつてるんです。

この前も、科学に興味があるならこんな本はどうかなつて、シャーロック・ホームズを紹介してくれて。で読み始めたら面白くて、あつという間に全集ひとつおり読んでしまつたんですよ。自分でも信じられない。これまで物語つて興味なかつたのに…。その次にはSFもいかもつてことで、アーサー・C・クラークの『幼年期の終わり』という本をいま読んでるところです』

いつの間にやらタケルの舌はター<sup>ボ</sup>全開の自動車さながらに回りまくっていた。少し汗ばんで、熱っぽい。井沢先生の名前が出たあたりからだ。

「その本は未来の科学についてすごくきつちり書かれてるんです。宇宙人がUFOでやってきて、地球人の予想もしなかつた進化を促すんだって」

「それならわしも読んだよ。名作だ。クラークのイマジネーションは人類でもトップクラスだな」

「先生言うには、三島由紀夫って人も絶賛してたんだつて」

「三島？　あかん、わしゃ文学には弱い！」

そういうって博士は苦笑した。

夏の夜は、虫の鳴き声とともに更けていった。タケルは、また博士に会いたいなと思つた。

9

電話の奥で何かが割れるような音がした。

「なに？」とタケルは尋ねた。

「ん——なに、またウチの動物たちが暴れとるんだろう。最近はずいぶんやんちゃになつてなあ」と博士。「どれ、見て来るかな」

「長い時間、聞いてくれてありがとう」

「いやいや、わしにとつてもタケルと話すのは楽しい。こちらこそありがとうございました。もう話し残したことはないか？」

タケルは考えた。何か言い忘れてことがあるような気がする。でも思い出せない。

「また電話します」

「そうしておくれ。じゃあ、おやすみ」

「おやすみなさい」と電話を切つた。

今夜はぐっすり眠れそうだ。

それから二日ほどは陽ざしの強い、快晴の日が続いたものの、三日目にしてあいにくの雨模様となつた。タケルは学校で借りた本を昨晩中にすべて読み終えていたので、今日はどうしても登校して次の本を借りたかつた。それに今日は井沢先生が当番の日だ。TVのニュースによると、大きな台風がゆっくり近づいてるらしい。待つていても雨は止まないだろうという祖父ちゃんの意見を聞き、タケルは家を飛び出した。図書はビニール袋にしつかり包んでリュックに入れ、頭からレインコートをすっぽりとかぶつての完全武装だ。

道路はもうあちこちに水たまりができ始めていた。タケルは自転車をいつもの半分のスピードに保ちながら坂道を下つていった。

学校には9時半前に到着した。こんな時間に図書室目当てで来る生徒なんか他にいないだろう。雨足は心なし  
か少し強くなつた気がする。タケルは駐輪場に自転車を止め、図書室の軒下まで走つた。いま図書室はプレハブ  
製の仮家屋で、校舎とは独立している。本当の図書室は、  
蔵書数が増えたので拡張工事中なのだ。

図書室の入口は鍵が掛けたままだつた。おかしいな、  
今日は9時から開いてるはずなのに。鍵は当番の先生が  
開けてくれることになつていて。ガラス窓から覗くと電  
灯もついてない。

タケルは職員室に行つてみた。他の先生はいたが井沢  
先生の姿はない。尋ねるとまだ登校されてないという。  
どうしたんだろう。タケルは職員用の駐車場に足を向け  
た。雨の日は愛用の車で来るはずだ。校舎の出入口から  
目を透かしてみた。

あつた！ 先生の赤の車だ…！

雨空の下、くすんだ霧雨に包まれて井沢先生の赤い車  
は駐車場でひときわ目立つてゐる。ボディに合わせたシート  
の赤も、眼の良いタケルにはフロントガラス越しによ

く見える。

車内に動く影があつた。ドキッとした。先生がいるんだ。どうして降りて来ないんだろう。

泣いてる？

タケルはその場に立ちすくんでしまつた。顔にハンカチをあてて、うつむき加減の姿はまぎれもなく涙を拭う仕草はまぎれもない。半年前の母さんと同じだ。あのころの母さんは毎日泣いてばかりいたんだ。寄り添うタケルの姿も目に入らないかのように。

また見たくなりものが見えてしまつた。

タケルは自分の視力を呪つた。こんなことの繰り返しだ。もうたくさんだ。

車のドアが開いた。先生が降りてきた。施錠すると傘も開かずにこちらに歩いてくる。出入口のそばまで来たとき、やつとタケルに気づいた。

「あ：おはよう」

「——おはようございます。先生、図書室——」

「そうね、ごめんなさい、遅くなつて」

先生はぎこちない笑顔でタケルに応え、職員室へ急ぎ足で入つていつた。やがて鍵を持って図書室に向かい、開鍵してくれた。その間、タケルは

付いていきながら、うつむいたままだつた。。

むつとする空気の充満する図書室に入った先生は、貸

し出しカウンターの向こうへ回り、空調のスイッチを入れ、控え室の方へと姿を消した。タケルは居心地の悪さを感じた。いつもの図書室ではなかつた。返却図書をカウンターに置くや書架へと走り、数冊の本を抜き出して、貸し出しカードに名前と日付を書いてカウンターに置いた。

「先生！ 今日は天気が悪いので帰ります」

先生が何か言いながら控え室から出てきたが、タケルは先生の顔も見ずに深々とおじぎをして、図書室を飛び出した。

雨の中の坂道、自転車を押しながらタケルは悔しさでいっぱいだつた。なぜ逃げないといけないんだ。母さんのときだつてそうだ。タケルには何もできなかつた。タケルもいっしょになつて泣きたかつたけど、おろおろする祖母ちゃんを見てると泣けなかつた。「母さんを支えてやれ」という祖父ちゃんの言葉がタケルの感情をむりやり奥の方へ封じ込んだ。それでも耐えられず、母さんのそばから逃げた――。

その夜、タケルはたまらず新出博士にメールを打つた。

“タケルです。今夜お話できますか？”

タケルの携帯メールはいつも短い。メールを打つ相手つまりメル友は博士しかおらず、たいていはこんな通話伺いだけだからだ。関西へ移住して一学期が過ぎたのに、結局学校ではメールし合うほどの友達は得られなかつた。クラスメートとは普通に会話している。でも彼らの目には「よそよそしいヤツ」と映つてゐるのに違ひない。

2時間が過ぎた。メールの返事はまだ来ない。せつかちな博士にしては珍しいことだつた。タケルは今日借りてきた『地球の歴史』という本を机の上に開いて待つことにした。地球が生まれてから現在までのようすを一冊にまとめた本だ。

雨は一向にやまない。台風が接近しているのだから当然か。タケルはまんじりともせずページを繰つていた。ダメだ、今日はさすがに本を読む気分になれそうもなかつた。

いつしか陽が暮れていた。もう一度メールしようかと考へたが、思い直して直接コールすることにした。

博士の電話番号を選び、通話ボタンを押す。ルルルル、ルルルル、プシツ。つながつた。

「こんばんは、博士。お忙しいですか？」

タケルの声は勢い余つて早口になつた。

「プツ」

なんだ？ ノイズ？ と、笑い声が聞こえた。ノイズ

じゃなくて吹き出した声だつたようだ。

「オマエ、誰よ？」向こうの声が言つた。

博士じゃない！ 誰だ？かけ間違えたのだろうか。いやそんなはずはない。タケルの携帯には他に登録してある番号なんかないのだ。

「ふーん、タケルっていうのか」

どうやら画面にタケルの名前が表示されているらしい。ということは博士の携帯に間違いない。

「あの…博士はいないんでしようか？」

タケルはおそるおそる相手に問い合わせた。

「知らねえよ。バーク」

そう言って、いきなり通話は切れた。切れる直前に別の笑い声と、何かが床に落ちて壊れるような物音がした。肝の冷えるような大きな音が。

タケルの頭は混乱した。どうしたんだろう博士は。落とした携帯を誰かに拾われたんだろうか。それとも…わからない。

いつの間にか、タケルは机に突つ伏して泣いていた。今日はわからないことだらけだ。先生も、博士も。いつもぼくはどうすればいいんだ！

泣き続けたタケルは、やがて泣き疲れて、そのまま眠りに落ちていた。